

## たぬきの糸車

愛知サークル 半田市立亀崎小学校 由井みどり

中心人物：おかみさんとたぬき

## 1 場面分けとラベリング・問題づくり

## 【一場面】①

「きこりの夫婦が住んでいた山奥の一軒家に、たぬきが毎晩のようにやってきていたずらをした話」

- ・毎晩のようになってどうということ？毎晩とどう違うの。
- ・いたずらって何？どんなことをするの。
- ・「そこで、きこりはわなをしかけました。」とあるけれど、おかみさんは同意したのか。(対立問題)

## 【二場面】②～⑥

「おかみさんが糸をつむいでいたら、たぬきが糸車をまわすまねをした話」

- ・おかみさんは、思わず吹き出しそうになったのに黙って糸車を回したのはなぜか。目的は何か。
- ・ふきだしそうって、吹き出したのか吹き出してないか。(対立問題)
- ・それまでは「毎晩のように」だったのが、「毎晩毎晩」に変わった。どう違うのか。
- ・「いたずらもんだが、かわいいな。」ってどうということ？かわいいって何。迷惑をかけるたぬきが、どうしてかわいいのか。どこが、かわいいのか。

## 【三場面】⑦～⑧

「おかみさんが、わなにかかったたぬきを逃がした話」

- ・「こわごわ」って、おかみさんは、何がこわかったのか。
- ・「いってみる」とあるけど、おかみさんは、何を確かめようとしたのか。
- ・おかみさんは、たぬきが罠にかかっていると予想したか。(対立問題)
- ・せっかくきこりがしかけたわなにかかったたぬきを、おかみさんはどうして逃がしてやったのか。

## 【四場面】⑨～⑭

「おかみさんが小屋に戻ると、いつかのたぬきが糸をつむいでいた話」

- ・⑩でおかみさんが驚いた原因は何か。
- ・⑪でおかみさんがびっくりした原因は何か。
- ・どうして、たぬきがじょうずな手つきで糸をつむいでいるのか。
- ・茶色のしっぽがちらりと見えたとき、おかみさんはたぬきがいると予想したか。(対立問題)
- ・おかみさんがのぞいているのに気がついて、たぬきは外にとび下りたのに、何でうれしいの。
- ・⑭でたぬきは、何がうれしいのか。たぬきの願いは何だったのか。

## 2 解釈

昔、山奥にきこりの夫婦が住んでいた。山奥の一軒家なので、たぬきはこの一軒家に毎晩のようにやってきていたずらをした。それは大変迷惑なことだ。そういうことがあったので、きこりはいたずらを防ぐため、たぬきを生け捕りにしようとななをしかけたのである。この時点では、おかみさんもわなを仕掛けることには、賛同していたと思われる。

「ある月のきれいなばん」、中秋の名月のような、明かりがなくても歩けるぐらいに明るいお月夜の出来事である。働き者のおかみさんが糸車を回して糸を紡いでいると、破れ障子の穴から二つの目

玉がこちらをのぞいていた。糸車がまわるにつれて二つの目玉もくるりくるりと回り、障子には糸車を回す真似をするたぬきの影が映った。おかみさんはそれを見て思わず吹き出しそうになったが、黙って糸車を回していた。吹き出してしまうと、たぬきに気づかれ、たぬきが逃げてしまうと思ったからだ。おかみさんは、糸車を回す真似をするたぬきをおもしろいと思い、気づかないふりをしてもっと障子に映る姿を見て楽しみたかったのだ。

この日を境に、たぬきは、「毎晩毎晩」やってきて、糸車を回す真似を繰り返すようになった。雨の日も、風の日もどんなことがあったとしてもやってきたということだ。だからこそ、以前はいたずらをしたので、きこりが罠をしかけたほどのたぬきのことを、おかみさんは「いたずらもんだが、かわいいな。」と思うようになったのである。それは、たぬきが「いたずらもん」から自分の子どものような、守ってやらなければならないと思うような「かわいい」存在に変わったのである。

ある晩、小屋の裏でキャーッという叫び声がした。このとき、おかみさんはいつものたぬきその罠にかかったのではないかと恐れた。「おかみさんがこわごわいってみると」の、「こわごわ」は、「かわいいな」と思うようになっていたたぬきが罠にかかることである。もし、おかみさんの身に危険を感じて怖いのであれば、きこりに行ってもらえばいいのに、おかみさんは一人で「いってみる」のである。それは、一人で確かめたいことがあったのである。そして、案の定、「いってみると」、その罠に、たぬきがかかっていたのだ。そこで、おかみさんは、「かわいそうに。わなになんかかかるんじゃないよ。たぬきじるにされてしまうで。」と言って、たぬきを逃がしてやるのだった。このときには、もうおかみさんにとっては、「罠」なんて、とんでもない馬鹿げたものに変わっており、たぬきの命こそ守るべき大切なものになっていたことが「罠になんか」から分かる。

やがて、冬がやってくるときこりの夫婦は村へ下りて行き、冬の間、山奥の一軒家は無人となる。そして、春になると夫婦はまた山奥の小屋に戻ってくるのだ。しかし、おかみさんが戸を開けたとき、無人で何も無いはずの板の間に、白い糸の束が山のように積んであり、その上「ほこりだらけのはずの糸車には、まきかけた糸までかかっている」のだ。おかみさんの「あっと おどろきました」の理由である。普通では考えられない事態に直面しているところに、さらに、自分が回しているわけでもないのに糸車の回る音がして、おかみさんはびっくりするのだ。ちらりと一瞬見えたしっぽに思い当たり、気づかれないようにそっとのぞくと、罠を外して逃がしてやった「いたずらもんだがかわいい」「いつかのたぬき」が、じょうずな手つきで、糸をつむいでいるのだった。そして、いつもおかみさんがしていたとおりに、束ねてわきに積み重ねるところを見て、おかみさんは不思議な出来事について全て合点がいったのだ。

たぬきは、突然おかみさんがのぞいているのに気づいて外にとび下りて帰っていくが、このときの様子が「うれしくてたまらないというように、ぴょんぴょこおどりながら」帰っていく。いったい、何がそんなにうれしかったのだろう。たぬきの願いは何だったのかという問題が最後に残る。しかし、「いうように」とあるので、誰から見てそう見えたかという問題がある。おかみさんか作者から見てそう見えただけで、たぬきが自分でうれしくてたまらないと言っているわけではない。きこりの夫婦が留守の間、小屋に入り浸って山のように糸の束を積むほど糸を紡いだから、糸車を回して糸を紡ぎたかったことは確かである。だから、糸車を回したい、糸を紡ぎたいというたぬきの願いは叶っているが、それ以上のことは分からない。